

令和5年度病虫害発生予報 第1号（4月予報）

令和5年3月29日
青森県病虫害防除所

【概要】

水 稲：フザリウム・ピシウム属菌等の苗立枯病及び細菌性の苗立枯病は平年並、ばか苗病はやや少ないと予想される。

りんご：モニリア病は少ない、腐らん病はやや多いと予想される。リンゴコカクモンハマキ、ミダレカクモンハマキは平年並、キンモンホソガは津軽地域で少なく、県南地域で多い、リンゴハダニは津軽地域でやや多く、県南地域で平年並と予想される。

野 菜：にんにくの春腐病はやや多い、さび病はやや少ないと予想される。

1 予報内容

(1) 水 稲

病虫害名	予 報 内 容			予 報 の 根 拠
	発生地域	発生時期	発生量	
苗立枯病 (フザリウム・ ピシウム属菌等)	県内全域	—	平年並	①向こう1か月の気温は平年より高いと予想される(±)。
苗立枯病 (もみ枯細菌病) (苗立枯細菌病)	県内全域	—	平年並	①前年の発生量は平年並であった(±)。 ②種子更新及び種子消毒が徹底されている(-)。 ③向こう1か月の気温は平年より高いと予想される(+)
ばか苗病	県内全域	—	やや少ない	①前年の本田での発生量は平年並であった(±)。 ②種子更新及び種子消毒が徹底されている(-)。

(2) りんご

病虫害名	予 報 内 容			予 報 の 根 拠
	発生地域	発生時期	発生量	
モニリア病 (葉腐れ)	県内全域	早い	少ない	①りんごの発芽は平年より早い。 ②前年の実腐れの発生量は平年より少なかった(-)。 ③向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予想される(±)。
腐らん病 (枝腐らん)	県内全域	—	やや多い	①3月中旬の発生量は平年より多い(+)
リンゴコカクモン ハマキ	県内全域	早い (越冬巣から の脱出)	平年並	①向こう1か月の気温は平年より高いと予想される。 ②越冬幼虫量は平年並である(±)。
ミダレカクモンハ マキ	県内全域	早い (越冬卵のふ化)	平年並	①向こう1か月の気温は平年より高いと予想される。 ②越冬卵塊量は平年並である(±)。
キンモンホソガ	津軽地域	早い (越冬成虫羽化)	少ない	①向こう1か月の気温は平年より高いと予想される。 ②前年秋の発生量は津軽地域で平年より少なく(-)、県南地域で平年より多かった(+)
	県南地域		多い	
リンゴハダニ	津軽地域	早い (越冬卵のふ化)	やや多い	①向こう1か月の気温は平年より高いと予想される。 ②越冬卵量は津軽地域で平年よりやや多く(+)、 県南地域で平年並(±)である。
	県南地域		平年並	

(3) 野菜

病害虫名	予報内容			予報の根拠
	発生地域	発生時期	発生量	
(にんにく) 春腐病	県内全域	—	やや多い	①越冬前の巡回調査における生育量は平年並か、やや上回っていた(±)。 ②向こう1か月の気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並と予想される(+)
(にんにく) さび病	県内全域	やや早い	やや少ない	①越冬前の発生量は平年より少ない(-)。 ②向こう1か月の気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並と予想される(+)

※ 予報の根拠内の気象情報は、3月23日発表「向こう1か月の天候の見通し」による。
発生量に対し、(+)：多くなる要因、(-)：少くなる要因、(±)：多少に大きく影響しない要因

2 防除のポイント

薬剤名の後に記載している括弧内の数字・記号は、有効成分の作用機構分類RACコードを示す。なお、混合剤等、複数の有効成分を含む剤はコードをカンマで区切って併記した。FRAC農業用殺菌剤作用機構分類及びIRAC農業用殺虫剤作用機構分類の最新版は農薬工業会ホームページ (<http://www.jcpa.or.jp/lab0/mechanism.html>) を参照。

(1) 水 稻

《 3～4月の防除作業 》

3月	4月					
6半旬	1半旬	2半旬	3半旬	4半旬	5半旬	6半旬
塩水選	浸種	催芽・は種	出芽・緑化	硬化		

◎種子消毒

◎ フザリウム・ピシウム属菌による苗立枯病防除

△ リゾープス属菌等
細菌性苗立枯病菌による苗立枯病防除

△ イネドロオイムシ
イネミズゾウムシ防除 (床土混和・は種時処理)

△ いもち病 (は種前・は種時処理)

△ いもち病 (緑化期処理)
イネドロオイムシ
イネミズゾウムシ

注：◎印は必ず防除する。

△印は前年の発生状況及び品種に応じて防除する。

防除薬剤は農作物病虫害防除指針等を参照するか、指導機関に問い合わせる。

【 浸 種 】

- ① 水の量は、種もみの2倍かそれ以上の容量とする。
- ② 消毒後の浸種は流水を避け、水の交換は始めの2日間を行わない。その後は3日に1回程度、静かに水の入れ換えを行う。
- ③ 浸種中の水温が低いと消毒の効果が低下するおそれがあるので、10℃以下にならないようにする。

【 催 芽 】

- ① 芽や根を伸ばし過ぎると、は種時の芽や根の折れを招き、雑菌に感染しやすくなるので、催芽は鳩胸程度とする。

【 フザリウム・ピシウム属菌による苗立枯病の防除 】

- ① 土壌のpHを5.0前後に矯正する。
- ② タチガレエースM粉剤 (F:32,4) 又はナエファイン粉剤 (F:U17) をは種前に土壌混和するか、タチガレエースM液剤 (F:32,4) 又はナエファインフロアブル (F:U17)、ヘッド顆粒水和剤 (F:21, I:28)、オラクル顆粒水和剤 (F:21) をは種時にかん注する。(ただし、ヘッド顆粒水和剤、オラクル顆粒水和剤は苗立枯病(フザリウム菌)の農薬登録はない。)
- ③ 発病のごく初期にタチガレエースM液剤 (F:32,4) をかん注する。なお、タチガレエース剤 (F:32,4) は、粉剤と液剤それぞれ1回しか使用できない。
- ④ 育苗中の温度管理を徹底し、また、乾燥・過湿を繰り返さないようにする。

【 リゾープス属菌による苗立枯病の防除 】

- ① 傷もみの混入が多いと多発しやすいので、傷もみが多い場合は、種子として使用しない。
- ② 厚播きすると発生が多くなるので、基準のは種量を守る。
- ③ ダコニール粉剤 (F:M05) をは種前に土壌混和するか、ダコニール1000 (F:M05) をは種時～緑化期にかん注する。
- ④ 高温、過湿で多発するので管理に注意する。

【 もみ枯細菌病・苗立枯細菌病菌による苗立枯病の防除 】

- ① 細菌病に効果のある種子消毒剤で消毒する。
- ② カスミン粒剤 (F:24) をは種前に土壌混和するか、は種後覆土前に種もみの上から均一に散粒する。
- ③ 育苗中の温度管理を徹底する。特に高温、過かん水にならないように注意する。

【 ばか苗病の防除 】

- ① 前年は、自家採取や温湯消毒を行っている一部の農家のほ場で発生が目立った。
- ② 温湯消毒や生物農薬は、化学合成農薬に比べて防除効果が不安定である。効果を安定させるため、処理方法や消毒後の管理方法を厳守する。
- ③ 育苗中の発病苗(徒長苗)は見つけ次第抜き取る。

【 は種時または緑化期におけるいもち病(葉いもち)の防除 】

- ① いもち病抵抗性「中」以下の品種を作付する場合、箱施用剤や水和剤による予防防除を行う。
- ② 薬剤耐性いもち病菌への対策を地域一帯となって実施する。

【 薬剤耐性いもち病菌への対策 】

Q o I 剤耐性菌が東北地域でも確認されている。

本県における耐性菌の発生を未然に防ぐため、以下の対策を地域一体となって実施すること。

ア 耐性菌の発生リスクを回避するため、同一系統剤の連続での使用を避ける。

イ Q o I 剤は育苗期から本田期を通じて年1回以内の使用に止める。

① 上記の剤は、1年ごとに作用機構の異なる薬剤とローテーションで使用する。

② これらの成分を含む本田散布剤は、多発時の使用を避ける。

③ オリブライト剤 (F:11)、アミスター剤 (F:11) は同一系統剤とみなす。

ウ 種子流通に伴い耐性菌が広範囲に伝播することがあるため、採種ほ及びその周辺ではこれらの成分を含む薬剤は使用しない。

エ 自家採種は耐性菌発達の原因となるので、種子更新、塩水選及び種子消毒を行う。購入種子(他県産稲、飼料用稲を含む)でも必ず種子消毒を行う。

オ 適正な肥培管理を厳守するとともに、早期発見と早期防除に努める。薬剤は使用方法に記載された使用量及び希釈倍数を厳守する。

カ Q o I 剤を使用した水田において、いもち病(葉いもち、穂いもち)が多発生した場合には、罹病葉(穂)を採取し、病虫害防除所又は関係指導機関に連絡するとともに、他系統薬剤で追加防除を行う。

【 は種前～緑化期におけるイネドロオイムシ、イネミズゾウムシの防除 】

- ① 例年発生が多いほ場や本田での防除が労力的に難しい場合には、箱施用剤(粒剤・水和剤など)により防除を行う。

☆ポジティブリスト制度に関わる注意点

育苗後、苗床跡に他作物を栽培する場合の箱施用剤は、以下のいずれかで処理する。

- ① は種時～育苗期間に処理する場合は、箱施用した農薬が置床にこぼれ落ちないように、また、かん水とともに置床に浸透しないように、プール育苗にするか、置床にビニルなどの無孔シートを敷く。
- ② 移植時に処理する場合は、ハウス外で行う。ハウス内で行う場合は、ビニルなどの無孔シート等の上で行い、置床に農薬がこぼれ落ちないようにする。

(2) りんご

【 モニリア病 】

- ① 消雪を早め、園地の排水に努め、地表面の乾燥を図る。
- ② 「展葉1週間後頃」は葉腐れの防除上最も重要な時期なので、ベフラン液剤25を適期に散布する。
- ③ 葉腐れは見つけ次第摘み取り、処分する。
- ④ 「開花直前」にSDHI剤（オルフィンフロアブル、ネクスターフロアブル、フルーツセイバー、カナメフロアブル、パレード15フロアブル）を散布する。

【 腐らん病 】

- ① 「展葉1週間後頃」にベフラン液剤25を散布する。
- ② 薬剤だけに頼ることなく、常時園内を見回り、早期発見、早期治療を行う。また、肥培管理、被害枝及び剪定枝の処理など総合管理に努める。
- ③ 剪定した切口にはその日のうちにバッチレート塗る。
- ④ 粗皮削りは必ず行う。
- ⑤ 胴腐らんは見つけ次第泥巻きを行うか、削り取って塗布剤（フランカットスプレー、バッチレート、トップジンMオイルペースト）を塗る。

【 黒星病 】

- ① 前年の被害落葉をレーキや竹ぼうき等で集め、ほ場外へ搬出・処分する。わい化栽培では、樹冠下に集めて、深さ5cmで1回、小型耕うん機ですき込みする。下草が生育し始めると、からみついて処理が難しくなるので、できるだけ早い時期に処理を行う。
- ② 重点防除時期である「展葉1週間後頃」から「落花20日後頃」まで散布間隔を守る。
- ③ 「展葉1週間後頃」にベフラン液剤25を散布する。
- ④ 「開花直前」にSDHI剤（オルフィンフロアブル、ネクスターフロアブル、フルーツセイバー、カナメフロアブル、パレード15フロアブル）を散布する。
- ⑤ 「落花直後」にミギワ20フロアブルと、デランフロアブル又はチウラム剤（チオノックフロアブル、トレノックスフロアブル）又はマンゼブ剤（ジマンダイセン水和剤、ペンコゼブ水和剤）を散布する。

【 ハマキムシ類 】

- ① ミダレカクモンハマキの発生が多い園地では、「開花直前」及び「落花直後」にIGR剤（ロムダンフロアブル、カスケード乳剤、アタブロンSC）、又はBT剤（ファイブスター顆粒水和剤、バイオマックスDF）のいずれかを選択し、同一薬剤を連続して使用する。
- ② リンゴコカクモンハマキの越冬世代幼虫が多い園地では、「落花直後」にIGR剤（カスケード乳剤、アタブロンSC）を使用する。

【 キンモンホソガ 】

- ① 発生が多い場合は、「展葉1週間後頃」にバリアード顆粒水和剤又はIGR剤（デミリン水和剤、ノーモルト乳剤）を使用する。
- ② 開花期から落花直後頃の間根ばやを切り取る。

【 リンゴハダニ 】

- ① 「展葉1週間後頃」にマシン油乳剤を散布する。
- ② 開花期にリンゴハダニの発生が多い園地では、「落花直後」にバロックフロアブルを使用する。

【クワコナカイガラムシ】

- ① 粗皮削りをしながら越冬卵をすりつぶし、削り落とした粗皮は処分する。
- ② 越冬世代の発生が多い園地では、「展葉1週間後頃」にアブロードフロアブルも使用する。

【リンゴクビレアブラムシ】

- ① 発生が多い園地では、「展葉1週間後頃」にバリアード顆粒水和剤を使用する。

参考表 りんごに使用する農薬の作用機構分類

<殺菌剤>

農薬名	有効成分	FRAC コード	系統名
ベフラン液剤25	イミノクタジン酢酸塩	M07	ビスグアニジン
オルフィンフロアブル	フルオピラム	7	SDHI
ネクスターフロアブル	イソピラザム	7	SDHI
フルーツセイバー	ペンチオピラド	7	SDHI
カナメフロアブル	インピルフルキサム	7	SDHI
パレード15フロアブル	ピラジフルミド	7	SDHI
ミギワ20フロアブル	イプフルフェノキン	52	DHODHI
デランフロアブル	ジチアノン	M09	キノン
チオノックフロアブル	チウラム	M03	ジチオカーバメート
トレノックスフロアブル	チウラム	M03	ジチオカーバメート
ジマンダイセン水和剤	マンゼブ	M03	ジチオカーバメート
ペンコゼブ水和剤	マンゼブ	M03	ジチオカーバメート
バッチレート	有機銅	M01	有機銅
フランカットスプレー	ポリオキシシンD亜鉛塩	19	抗生物質
トップジンMオイルペースト	チオファネートメチル	1	ベンゾイミダゾール

<殺虫剤>

農薬名	有効成分	IRAC コード	系統名
ロムダンフロアブル	テブフェノジド	18	IGR
カスケード乳剤	フルフェノクスロン	15	IGR
アタブロンSC	クロルフルアズロン	15	IGR
デミリン水和剤	ジフルベンズロン	15	IGR
ノーモルト乳剤	テフルベンズロン	15	IGR
アブロードフロアブル	ブプロフェジン	16	IGR
ファイブスター顆粒水和剤	BT（生菌）	11A	BT
バイオマックスDF	BT（生菌）	11A	BT
バリアード顆粒水和剤	チアクロプリド	4A	ネオニコチノイド
マシン油乳剤	マシン油	-	マシン油
バロックフロアブル	エトキサゾール	10B	ダニ類成長阻害

注) FRAC農業用殺菌剤作用機構分類及びIRAC農業用殺虫剤作用機構分類の最新版は農薬工業会ホームページ (<https://www.jcpa.or.jp/labo/mechanism.html>) を参照。

(3) 特産果樹

○ ぶどう

【晩腐病】

- ① 架線の巻きひげ、成り跡、被害枝の切り取り、剪定枝の処分などの作業を徹底する。
- ② 「休眠期」は重要な防除時期であるので、樹体に薬液が十分かかるようにていねいに散布する。「キャンベル・アーリー」では、ベフラン液剤25、デランフロアブル、パスポート顆粒水和剤のいずれかを散布する。「スチューベン」では、デランフロアブル、パスポート顆粒水和剤、ベンレート水和剤のいずれかを散布する。

○ おうとう

【 灰星病 】

- ① 樹上のミイラ果を摘み取って処分し、菌密度の低下を図る。
- ② 越冬菌核の子のう盤（キノコ）形成を抑制するために、早春に園地を清掃・耕起し、乾燥を図る。
- ③ 「開花直前」にオーソサイド水和剤80を散布し、「満開5日後頃」にパスワード顆粒水和剤、オンリーワンフロアブル、ラリー水和剤、オーシャイン水和剤のいずれかを散布する。

【 コスカシバ 】

- ① 開花前までにフェニックスフロアブルを樹幹部に薬液が十分かかるように手散布する。

○ もも

【 せん孔細菌病 】

- ① 風を強く受ける地帯で多発するので、防風網の設置などの耕種的対策を徹底する。
- ② 春型枝病斑は、葉や果実への伝染源となるので、見つけ次第、枝ごと切り取って処分する。
- ③ 「開花直前」に I C ボルドー412を散布する。

【 コスカシバ 】

- ① 開花前までにフェニックスフロアブルを樹幹部に薬液が十分かかるように手散布する。

参考表 特産果樹に使用する農薬の作用機構分類

<殺菌剤>

農薬名	有効成分	FRAC コード	系統名
ベフラン液剤25	イミノクタジン酢酸塩	M07	ビスグアニジン
デランフロアブル	ジチアノン	M09	キノン
パスポート顆粒水和剤	T P N	M05	クロロニトリル
ベンレート水和剤	ベノミル	1	ベンゾイミダゾール
オーソサイド水和剤80	キャプタン	M04	フタルイミド
パスワード顆粒水和剤	フェンヘキサミド	17	ヒドロキシアニリド
オンリーワンフロアブル	テブコナゾール	3	D M I
ラリー水和剤	マイクロブタニル	3	D M I
オーシャイン水和剤	オキスポコナゾールフマル酸塩	3	D M I
I C ボルドー412	塩基性硫酸銅	M01	銅

<殺虫剤>

農薬名	有効成分	IRAC コード	系統名
フェニックスフロアブル	フルベンジアミド	28	ジアミド

注) FRAC農業用殺菌剤作用機構分類及びIRAC農業用殺虫剤作用機構分類の最新版は農薬工業会ホームページ (<https://www.jcpa.or.jp/labo/mechanism.html>) を参照。

(4) 野 菜

○ にんにく

【 春腐病 】

- ① 越冬前の生育が旺盛で積雪期間が100日を超えると、越冬中に凍雪害を受けて腐敗株が発生しやすい。
- ② 消雪が遅いほ場や排水の悪いほ場では、滞水しないよう排水に努める。
- ③ 消雪後の腐敗株は、伝染源となることがあるので抜き取る。
- ④ 抜き取り後、降雨が予想される場合には天候を見ながら予防散布を実施する。
- ⑤ 新たな腐敗株を認めた場合は、早急に抜き取り、7日おきくらいに薬剤散布を実施する。
- ⑥ 有機物の過剰投入や窒素過多等で生育が旺盛なほ場では多発する傾向があるので、予防散布に努める。

【さび病】

- ① 消雪の早い地域や消雪後気温が高い日が続く場合は、越冬菌糸由来の病斑が例年より早く見られる。
- ② 初発時期が早いほど多発する傾向がある。また、肥料切れなどで草勢が衰えた場合や、逆に窒素過剰の場合にも発生しやすくなる。
- ③ ほ場内を見回り、多くの株に病斑が数個ずつ発生している場合には治癒効果の高い薬剤で初期防除を行う。

★農薬を使用する際には必ず最新の農薬登録情報を確認してください★

農林水産省「農薬登録情報提供システム」 <https://pesticide.maff.go.jp/>
(独)農林水産消費安全技術センター「農薬登録情報・速報」
<http://www.acis.famic.go.jp/searchF/index/index.html>

☆農薬散布時は農薬の飛散防止対策をしてください☆

学校、保育所、病院、公園等の公共施設内の植物、街路樹並びに住宅地に近接する農地（市民農園や家庭菜園を含む）及び森林等において、農薬の飛散を原因とする住民や子ども等の健康被害が生じないように、飛散防止対策を徹底しましょう。農薬散布に当たっては、事前に周辺住民に対して、農薬使用の目的、散布日時、使用農薬の種類及び農薬使用者の連絡先等を幅広く周知するとともに、近辺に化学物質に敏感な人が居住していることを把握している場合には、十分配慮しましょう。

☆クロロピクリン剤の安全使用について☆

本県では、ながいもやごぼう等の根菜類の作付けが多く、土壌病害を防除するため、クロロピクリンが使用されていますが、その使用に当たっては次の事項を遵守しましょう。

<使用上の注意>

- 処理作業は、気温・地温の低い午前中か夕方に行う。
- 使用時は、防護マスクや防護メガネ等を着用する。
- 揮散したガスは低地にたまりやすいため、農地近郊の低位置に人家や畜舎等がある場合は使用しない。
- 降雨等により地下水や河川等に流入するおそれがある場合は使用しない。
- 人家や畜舎等に近接する農地での使用を避けるとともに、人家や畜舎等の近郊では、それらが風下になる場合は作業を一時中断する。
- 使用後は、直ちにポリエチレンフィルム等（厚さ0.03mm以上の厚めのもの、難透過性のもの）で被覆するなど、揮散防止のために必要な措置を講じる。
- 使用済みの空き缶等は、周囲に影響を及ぼさないよう適切に処分する。
- トラック等で薬剤を運搬する場合は、薬剤が脱落しないよう確実に固定して積載する。
- 施錠可能な冷暗所に保管する。

《当情報に関する問い合わせ先》

青森県病害虫防除所 TEL:017-729-1717 FAX:017-729-1900
〒030-0113 青森市第二問屋町4-11-6
E-mail: byogaichu@pref.aomori.lg.jp

※当情報は、青森県農業・就農情報サイト「農なび青森」
(<https://www.nounavi-aomori.jp/>) に掲載しています。